

第85号

昭和58年5月25日

内容

日本思想史の歴史心理学.....1~3
 第122回大学共同セミナー.....2~3
 国際フォーラム.....4
 昭和57年度教育プログラム白書4~6
 法人ニュース.....6~7
 昭和57年度業務白書.....7
 事業部だより.....8~9
 ハウス再訪雑感.....8
 わたしたちの合宿.....9
 利用状況.....9~10

セミナー・ハウス

SEMINAR HOUSE NEWS

発行

財団法人 大学セミナー・ハウス

〈所在地〉

東京都八王子市下柚木(☎192-08)

電話 0426-76-8511~3

振替口座 東京 5-74590番

編集

大学セミナー・ハウス

企画室

編集人 中川秀哉

発行人 吉川孔敏

製作 中央公論事業出版

私は、ユング心理学と歴史の両方があるように関わるか、という問題に関心を持っている。ユングは、たとえば錬金術といった歴史的材料をとりあげて、心理学的立場からその意味を明らかにするような仕事をしたが、一般的に深層心理学の立場から歴史をとらえるといった問題意識はみられない。そこで、深層心理学の視点から歴史をとらえることはいかにして可能か、そこにはどのような方法論の問題があるのか、ということに初めて論じておきたい。

近年、歴史の見方について、従来とは違った傾向がでてきている。それは歴史学の中に民俗学や人類学との交流が開けてきているという事実を示されている。昔、柳田国男は「罽入考」の中で、従来の歴史学に対する批判を行ない、優れた人物の成し遂げた事実だけでなく、微々たる無名の民衆が、無意識の中に変化させた婚姻制度のようなものも歴史学に属するのではないかと主張している。この議論は当時受け入れられなかったが、同様な議論が、フランスのアナール学派の考え方にもみられる。彼らによれば、真の歴史とは、その当時の人々が、無意識の中で従っていた考え方や民俗的観念を前提にしないと理解できない。彼らは歴史を、いろいろな波長、あるいは何段ものレベルにわけ、資料の上に直接現われた表面の動きだけでなく、深い次元にある民衆のメンタリティまで視野に入れてとらえてゆく必要があると考えている。歴史というものを立体的な深層を持ったものとして

把握してゆくのである。一例を挙げれば、歴史家シャルル・ルフェーブルは、集合的心性というものを問題にして、人間の集まりを群衆、半意識的な集合体、結集体という三つのレベルでとらえた。彼によれば、群衆とはまったく無方向な無秩序の動きをし、その逆に、結集体は一定の目的や意志をはっきりと持った個人の集まりとしてとらえられる。従来の歴史の描き方は、歴史を動かす要因として、この結集体に注目し、背後に控えた群衆をまったく無定形なものとして考えていたが、これに対してルフェーブル

らないと彼は述べている。そこで、私は深層心理学のほうからも、これに対応した見方ができるのではないかと考えている。ユングにひきつけていえば、ルフェーブルのいう集合的心性の底には、ユングのいう集合的無意識を置いてみればよくわかるのではないかと、というのが私の考えである。

このように見てくれば、いわばそれぞれの時代における精神の運動として、歴史を全体的、立体的に見てゆくことが可能なのではないだろうか。たとえば、神話時代から歴史時代に入ってゆく場合、

次に、このような視点から日本思想史を具体的に考えてみよう。私は主に日本の古代を専門とし、これまで神道と仏教との関わりの問題と、天皇の問題をとらえてきた。ここでは、天皇、あるいは宮廷のイメージが日本の歴史で、どのように形成されてきたか、ということ論じてみたい。

天皇に対する従来の見方には、明治時代の天皇観の影響が非常に強い。明治国家の天皇イメージを投影して古代をみるという見方である。これは、古代を理想化してみるという、本居宣長の国学からすでに始まっている見方であるが、その理想化のプロセスに近代的なイメージを混入させたのが明治の天皇観である。明治維新とは、「王政復古」という言葉に示されているように、武家政治によって失われた古代の王政、すなわち天皇の支配する政治が復活したことを意味している。その場合、天皇はネイション・国民として一つの統一を持った日本人の、その統一のシンボルとしてもちだされたのである。

第122回大学共同セミナー 全体講義から

日本思想史の歴史心理学

——歴史における神話——



筑波大学教授 湯浅 泰雄

は、日常生活の中で半ば意識的、半ば無意識的に人々の行動を規制している一つの条件としての習俗的集合体の様式に注目した。この半意識的集合体を支配しているのは、集合的心性と呼ばれるものであり、結局、人間はそうした集合的心性に従って多くの場合行動しており、その基礎の上にはじめて結集体というものでてくるというのである。意識のレベルでとらえられた行動の下に、人々を支配している半ば無意識的な行動のパターンがあり、歴史をみてゆく場合にはそれを重視しなければなら

心理学的にみればそれは無意識から意識が分化する過程としてとらえることができる。歴史は意識のレベルで、急速に発達してゆくが、その無意識の基盤に深く入れば入るほど変わらない層がつきつきにでてくる。歴史の動きの表面には、たとえば政治的、経済的な変化があり、それよりもさらに下のほうのもの考え方・感じ方としての思想、あるいはエートス、つまり文化様式の層があると私は思う。このように、習俗やメンタリティというように、いくつかの段階を設定して、歴史をとら

えてゆくことが必要なのではないか。

次に、このような視点から日本思想史を具体的に考えてみよう。私は主に日本の古代を専門とし、これまで神道と仏教との関わりの問題と、天皇の問題をとらえてきた。ここでは、天皇、あるいは宮廷のイメージが日本の歴史で、どのように形成されてきたか、ということ論じてみたい。

天皇に対する従来の見方には、明治時代の天皇観の影響が非常に強い。明治国家の天皇イメージを投影して古代をみるという見方である。これは、古代を理想化してみるという、本居宣長の国学からすでに始まっている見方であるが、その理想化のプロセスに近代的なイメージを混入させたのが明治の天皇観である。明治維新とは、「王政復古」という言葉に示されているように、武家政治によって失われた古代の王政、すなわち天皇の支配する政治が復活したことを意味している。その場合、天皇はネイション・国民として一つの統一を持った日本人の、その統一のシンボルとしてもちだされたのである。

しかしながら、日本人が一つのネイション・国民であるという意識、すなわち他と区別された日本人が一つのまとまりをもった民族だという意識は、非常に新しいものであり、ある意味では、それは近代的な意識であるということを見落としてはならない。明治憲法に具体化された天皇像は、官僚制および軍事組織の頂点に立つ近代国家の元首として位置づけられて

(2ページ4段めへつづく)

第122回大学共同セミナー

主題Ⅱ現代に生きるC・G・ユング

期日—昭和58年3月18～20日

E ユングの元型論

東京女子大学教授 林 道義氏

(運営委員)

△参加学生▽108名(内女子45名)

早大(14)、筑波大(13)、東大(11)、ICU、東京女子大(各6)、成城大、聖心女子大(各5)、立教大(4)、千葉大、桜美林大、慶大、明大(各3)、東京外大、信州大、浜松医大、青学大、学習院大、東京理大、日本女子大(各2)、東北大、埼玉大、お茶の水大、電通大、山梨医大、東京都立大、国学院大、上智大、中大、東洋大、日大、武蔵大、明学大、白梅学園短大(各1)、その他(4)合計33校

◇ ユングに関するセミナーは、一九八一年六月に行なわれた第14回「無意識からの人間理解—ユング心理学を中心に—」に続いて、今回二度目の企画である。前回、応募者が殺到して参加できなかった人たちのために、もう一度機会を作ることを約束したが、林道義氏が再度、企画・運営をかって出られたことよって、幸いにもここにその約束を果たすことができた。改めて林氏の労に対して、感謝の意を表したい。

◇ 応募者数は一三〇余名を数え、学生の間でユングに対する関心が相変わらず高いことが確認された。前回と同様、全員の申込みに



2度目の企画——盛況のユング・セミナー指導教授と参加者たち

応えきれず、応募理由を慎重に検討した結果、二〇人近くの人に参加をお断りしなければならぬほどの盛況ぶりであった。参加学生の中にも意欲的な学生が多く、ここ多摩の丘は、三日間文字通り活気に溢れることとなった。

◇ プログラムは、中川秀恭館長の歓迎のあいさつに続き、運営委員の林氏による全体講義で幕を開けた。ユングの思想に自らの安住の地を見出したと語る林氏は、ユング心理学における根本的発想について、大要以下のように話された。

ユング心理学は、心理療法の実践の中から生まれたものであり、その思想全体の根本には、ユング独自の「哲学」がある。それは、意識と無意識を統合する視点を獲得することによって、人間の心を全体として観察することを目指している。ここで重要なのは、ユングの主張した、人間をその無意識の深みから理解するということが、人間存在における非合理的・無意識的なものを、そのまま肯定することでは決してないという点である。ユングは、人間の心における非合理的な力を直視することの必要性を説いたのであり、自覚化・意識化の過程を通して、無意識的なものを洗練、制御し、正の価値へと転換してゆくことを主張したのである。そこで要求されているのは、非常に強い意識的な精神の力をもって、無意識の中から自我の核やパターンをとり出し

てくることであり、ここにユングのいう真の個性化・自己実現の過程がある。現代に生きる青年は、

(前ページからつづく)

いる。問題は、この近代的イメージとしての天皇が、何とはなしに古代の天皇像とつながっているという点である。明治の天皇イメージにおいては、古代神話における天皇と近代的なナショナルな統一のシンボルとしての天皇が結合されておられ、それは歴史的認識として、かなり無理がある。

この点で、非常に参考になったのは、三島由紀夫の論じた文化概念としての天皇という考えである。彼の天皇観の基本は、「みやび」ということにある。彼は、その具体的なイメージとして平安朝の宮廷美を考えていたのであるが、そこに天皇観の原点をみとると、というのが三島の出发点である。私は、彼の日本浪漫派的な発想には賛成できないが、少なくとも日本の天皇像の原点が古代ではなくて、むしろ平安朝以降にあるという彼の議論は、たいへん示唆に富んでいると思っている。

私はこれまでの研究から、天皇のイメージが、民衆層にまで入り込んだのは中世以降のことであると考えている。古代の宗教としての日本の神道は、ムラの宗教であり、日本国家全体というものは、その視野には入っていない。元来、天皇というのは律令制と共に出てきたものであり、神話時代とは何の関係もなく外から入ってきた概念である。初期の天皇観というのは、儒教や仏教といった外来のイデオロギーによって形成されたものであり、これはいわずも、民衆の間には定着しなかった。天皇が神話的なイメージと結びついてくるのは、中世に入ってからである。

り、古代の日本の民衆の間には、中国風の天皇のイメージはまったく存在しなかったといってもよいと思う。こうして、天皇の問題を思想的に論ずる場合は、むしろ中世の天皇制というものをよく考えてみる必要があるだろうというのが私の結論である。

このことは、中世の日本思想史を民話やおとぎ話のレヴェルまでみてゆくか明らかにする。御伽草子にある「ものぐさ太郎」や「みしま」の例に示されているように、そこには日常的な現実を超えた一つのユートピアとしての都がイメージ化されている。都においてすべての問題が、最後に天皇と結びつくことによって解決するわけである。実際には、当時の室町期の天皇制は政治権力がまらまら離れてしまい、現実的力は持っていないのであったのであるが、むしろ、この時期に天皇のイメージが、民衆の間で非常に理想化された形で伝わったのである。

それでは、どのようにしてこのイメージが、人々の間に形成されてきたのだろうか。一つには、それが当時の芸能民や民衆布教者の役割と密接に関係していることによるだろう。彼らは宗教性の非常に強い、一種のトリックスター的存在であり、秩序と反秩序、聖と俗の間を往来し、民衆の畏怖と軽蔑とといったアンビヴァレントな感情の対象であった。彼らの背景には、天皇や神社勢力と心理的また制度的な結びつきがあり、彼らの手で都の文化が地方へ伝達され、段々と民衆の生活の中に都のイメージが形づくられていったのである。

外側から与えられる期待された役割像に自己を適応させるのではなく、自らの内面を中心にした自我形成の仕方と直面し、対決しなければならぬのである。

以上のお話は、本セミナーの課題に一つの方向性を与えるものであり、参加者一同に改めてユング心理学の高い思想性と意義を確認させることになった。

◇ 二日目は、午前中のセクション演習に続き、昼食後にT・インモリス氏の全体講義が予定されていたが、ご病気のために残念ながら出席していただくことができず、かわりにインモリス氏の原稿を林氏が代読された。日本での長年にわたる豊富な経験と高度なユング心理学の知識に裏付けられた氏の日本人論の論点は以下のようである。

「ペルツイファール」に象徴されるように、西洋の文化では様式的変化と断絶が永遠に繰り返されるのに対して、日本は先史時代に文化の一致を見出して以来、それを本質的な変更なしに守り続けてきた。日本では、個人の創造的能力はあまり求められておらず、個々の人格は集団の中に根拠づけられており、そこでの倫理的行為は、集団の調和を維持することである。心理学的観点から見れば、これは日本がまだに母なるウロボロスにとらわれている「変わらざる民族」であることを示している。これからの日本人にとっての課題は、一人一人が母親のしがらみから脱出して、独立した個人へと成人することではあるまいか。



続いて湯浅氏による全体講義（要旨はフロントページに掲載）があり、交友館にて小時敏談の後、林氏の司会で指導教授全員の参加によるパネル・ディスカッションが開かれた。インモリス氏と湯浅氏が提起した諸問題をうけて、各指導教授がそれぞれ専門の立場からみた日本人論を披露された。「従来の日本人的な生き方に対して、西洋の個人主義的生き方が深層レベルで影響を与えつつあり、現代日本人は両者の裂け目に置かれ、葛藤状態にあるのではないか（小川氏）。「文化史的に見て、日本文化はある意味でヨーロッパに先んじており、日本人の意識の発達が無意識の段階に留まっているという指摘には疑問がある。その実態に即して、ヨーロッパのイメージを作り直す必要があるのではないか」（松代氏）。

◇ 「未分化な一体」という意味では、日本文化はウロボロスというよりは、母性的なといったほうがよいのではないかと。母性的宗教といった観点から見ると、日本人のメンタリティーがよくわかる」（久保田氏）。「日本文化の特徴といわれているものの中には、必ずしも日本に限らないものがある。文化の比較は、社会的、歴史的条件の中で慎重になされるべきである」（湯浅氏）。以上が各指導教授によって提起された問題点である。フロアを交えて活発な討論が展開され、盛況のうちに議論の幕を閉じた。

◇ 最終日は9時半より林氏自身が臨床された箱庭療法の実際がスライドを通じて上映された後、10時半から本セミナーの総括として全体集會が行なわれた。学生代表による各セクションごとの報告がなされた後、各指導教授によるコメントと参加学生による自由な議論の場がもたれた。「今、なぜユング心理学を学ぶのか」という学生の問いに対する小川氏の次の答えは印象的であった。「現代人は、あまり自分の内面の世界を考えなくなってきたのではないか。ユングは、心の内側の世界を自らの創造的な成長に結びつけてゆく道を我々に示している。各自が自分のあり方を模索する中で、自分の心の内側をのぞきこみながら自分の生き方を模索してほしい」。この言葉は、本セミナーのテーマ「現代に生きるC・G・ユング」を集約するにふさわしいものであったといえよう。

今や人間とその無意識の深みから理解する方法が、さまざまな領域において無視できない視点だとするならば、高度な思想性をもちつつ、多岐にわたる学問分野に新しい視点を提起しているユング心理学のもつ意義は大きい。ユングを学ぶということは、自分の内的な世界の体験を、自らの生き方の中に統合してゆく実践的な作業であり、その意味でこの三日間の多摩の丘での経験は、参加学生が新たな内面世界と出会うための格好の場となったことであろう。

新しい世界に踏み出して

——感動と出会いの三日間——

早稲田大学社会科学部四年

谷口 啓二

自分はいったい何者なのだろう

この過程で民衆側からイメージ化された天皇や宮廷は、現実の天皇制、あるいは宮廷勢力とはまったく無関係なものなので、そこにたいへん大きなイメージギャップが生じた。この意味で、それは一つのフィクションではあるが、こう。どう生きてゆけばよいのだろう。そういった疑問は幼少の頃より私を悩ませてきた。そのような彷徨の中で私はユングに出会った。

爾来、私はユングにひかれ、彼の書を読み耽った。しかし、彼の時ふと、次のような疑問が私の脳裡に浮かんだ。「今、自分は一人でユングを読み、一人ですっかり理解した気であるが、本当に正しく理解しているのだろうか。また、今ユングに心ひかれていて、若者は自分だけではないはずだ。未だ見ぬ彼らはいったい何処でどのようなことを考えているのだろうか……」。

そのような時、今回の大学共同セミナー「現代に生きるC・G・ユング」を知った。私は即座に決心した。それまでこのような催しには参加したことのない私であったが、期待が不安をはるかに凌駕していた。

セミナー・ハウスでの三日間は私の期待に充分応えてくれるものであった。まず一人合点の理解をしてはいないかどうかが専門の先生方によって確かめられた。とりわけセクションの先生とは講義以外の際にも気軽に談笑することもできた。このことは、私のようなマンモス大学で学ぶ者にとってはまず望めないことだけに、いたく感動した。

そして未だ見ぬ彼らとの出会いがあった。このことも私にとって忘れがたい感動である。同じような問題意識をもった彼らとの討議や談話は、私に新しい世界を教えてくれた。

セミナーでの交流はここだけで終わってしまうことなく、ついに、わが大学でも「ユング研究会」をつくらうという運びとなり、他のセクションに参加した早大生にも呼びかけて、現在、着々と準備に取り掛かっている。私は各セクションの学生委員に選ばれたこともあって、学生委員の連絡会やその他の打ち合わせ等でセミナー・ハウスのスタッフの皆さんの影の暖かい御助力のことも知った。これも私にとっては思わぬ勉強であった。

（第12回大学共同セミナーの全体講義より、文責・編集者）

（Eセクション）

◆国際フォーラム

現代フィリピン社会の苦悩

昭和58年3月25、26日

当ハウスの国際プログラム委員会が昭和52年に発足した時点で、内外人学者シンポジウムの企画が議論され、その年に二回のシンポジウムが開催された。その後、中断したまま五年が経過し、昨年、現代中国を主題にして第3回が行なわれている。今回は4回目に当たり、運営委員に菊地靖 広野良吉両氏の協力を仰ぎ実現したものである。

ド博士夫妻、菊地靖(早大)、広野良吉(成蹊)、中嶋嶺雄(東京外語大)、江沢洋(学習院大)、菊地京子(津田塾大)、宮本勝(国立民族学博物館)、川島緑(東大院生)の諸氏。

国際フォーラムを運営して

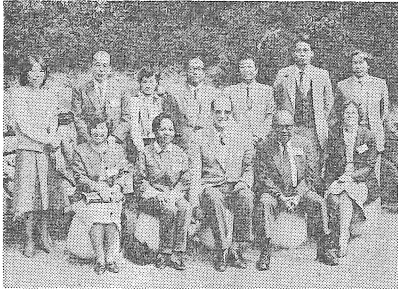
早稲田大学教授 菊地 靖

今回のゲストスピーカーは、小生の友人であるフィリピン言論界の第一人者として活躍されている Sonji Jose 氏(一九八〇年度マグサイサイ賞受賞作家で、国際文化会館の招聘で滞日中であつた)と、同じく滞日中のフィリピン地方政治学の権威であるカリフォルニア州立大学政治学部教授 Kit Machado 博士(現在、早稲田大学国際部参与)のお二人にお願いした。幸い、ご両人の快諾を得て、有意義な春の一夜を過ごすことができた。

期日が3月末ということもあって参加者が少なかつたが、ゲストのお二人はそれぞれ夫人同伴で一泊され、菊地氏は京子夫人とともに終始、ホスト役をとりとめて下さったお蔭で、活発な議論が深夜にまで及び、交流の実をあげることができた。討論の様子は、別掲の菊地氏のレポートにゆずりたい。

〔出席者〕

S・ホセ氏夫妻、K・マチャード博士夫妻



討論を終えて——ゲストの両夫妻(前列)と参加者(国際セミナー館前庭)

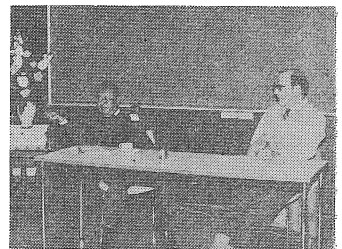
まず、夕食後、広野良吉氏と小生の司会でホセ氏の話から始められた。かれの作家としての立場は社会風刺や社会評論といった、反体制的なものに集約されており、常にフィリピン社会を他の文化社会との比較で見ようとしている。その意味で氏の社会的な影響力はたいへん大きいといえるし、その行動範囲は東西世界にまたがったあらゆる階層の知己をたくさんもつた国際人である。フィリピン社

会における苦悩の一部を、一般的な「知識人」として話していただいた。かれの話の重要な論点は、日本とフィリピンとの関係の中で、日本が何らかの形で精神的なものを輸出できないか、ということである。つまり、かれの言葉でいうならば、"Japanese Ethics" 日本人の道徳原理といったものを、日本は輸出すべきだと強調した(これは同時に日本の知識人への批判でもある)。つまり、今日のフィリピンでは、軍を中心とした新しい階層や少数民族問題および経済的貧困や、それぞれの集団間の利害の対立など数多くの問題がより深刻化してきているが、このような状況に対するフィリピンの知識人(良心ある)たちの苦悩に、日本は何か貢献することはできないだろうか、と結んだ。

マチャード氏はフィリピンの現代政治を類型化して「不安定な権威主義=Unstable Authoritarian System」と呼んだ。これは今日のフィリピン社会全体を十分説明しうる表現である。このような「不安定」な政体は、大統領の権威の依りどころが、近代的合理的統治機構ではなく、個人的大統領への忠誠心や恩義などの感情的な関係に根ざしているためである。

最後に、お二人のゲストスピーカーおよびお二人のご夫人、参加者の皆様と大学セミナー・ハウスのスタッフに対して、紙面をもってお礼と感謝を申し上げます。

昭和57年度は、表1にみるように大学共同セミナー(四回)、大学院共同セミナー(一回)、大学合同セミナー(一回)、国際学生セミナー(一回)、大学教員懇談会(一回)、



左：シオニール・ホセ氏、右：キット・マチャード氏(国際セミナー館セミナー室)

り、このような個人を中心とするネットワークは合理的な近代統治組織に比べ、危機的状況に対して非常に弱いのである。したがってこのような体制「組織的弱さを補うために、マルコス大統領は「軍」の力を利用して、さらに軍部内における大統領への忠誠心を強めるために、軍の側近をイロカノ化(Ilocanization)することによるアイデンティティー(自己証明)の高揚を図っている。

以上のお二人のお話に対して、出席者からそれぞれの興味に従って質問が出され、翌日の午前中も継続して討論が行なわれた。

最後に、お二人のゲストスピーカーおよびお二人のご夫人、参加者の皆様と大学セミナー・ハウスのスタッフに対して、紙面をもってお礼と感謝を申し上げます。

昭和57年度 教育プログラム白書

国際フォーラム(一回)を実施した。総合計一〇回が、当ハウスの開催した教育プログラムの全容である。表2①②③は、学生を対象と

しているプログラム計八回分の参加状況をそれぞれ大学別、学科別、学年別にみたものである。しかしながら、国際フォーラムについては統計資料から省いた。

まず、参加者総数は表2①にみるように五八八名を数えた。()内の数字は内数で、大学合同セミナー二回分の参加者数である。大学合同セミナーは、数で数える。個人参加の他のプログラムと区別した。総数五八八名は各回平均すると七三・五人となり、総じてみれば、大学間と学問分野間の交流を根幹とした相互の人格的接触が十分に達成された規模とみることができよう。

因みに大学共同セミナーの参加状況についてみれば、各回の参加人員は表1に示されているように二八名から一〇八名まで大きな幅が生じており、テーマとの関連でとらえると、学生の関心が窺えて興味深いところである。ただし各回平均は五五・三人となり前年度よりさらに下回る結果となっている。

参加者の多い上位の大学は、早稲田、慶応、東京、明治、一橋、ICU、津田塾の順となり、大学合同セミナーを除いた場合、その順序は、東京、早稲田、筑波、一橋、慶応、ICUで、東京、早稲田が多いのは従来傾向である。

表2②で参加者の専攻分野をみると、57年度の特徴は社会科学系が全体の五・五%を占めていることであり、年間のテーマの比重がこれを裏づけている。男女の比率が六二対三八となつて、女子

〈表1〉昭和57年度教育プログラム開催状況

▶大学共同セミナー

回数	期間	主 題	指 導 教 授 名	参加人員
第119回 (1)	昭和57年 5月21日～23日	ヨーロッパ中世と現代 —歴史家とともに—	二宮宏之, 三好洋子, 佐々木克巳, 山田欣吾, 阿部謙也*	46名 (19校)
第120回 (2)	12月17日～19日	地球の過去・現在・未来 —太陽と環境と生命—	野田春彦, 櫻井邦朋, 福西浩, 廣田勇, 大林 辰蔵, 芳野起夫*	28名 (17校)
第121回 (3)	昭和58年 1月7日～9日	人間の攻撃性を考える —ヒトの性は善か悪か—	篠田正浩, 尾本恵市*, 小浪充*, 西田利貞, 佐 藤方哉, 畑中幸子	39名 (23校)
第122回 (4)	3月18日～20日	現代に生きるC.G. ユング	林道義*, トマス・インモース, 湯浅泰雄, 小 川徒之, 松代洋一, 久保田圭伍	108名 (33校)

▶大学院共同セミナー

第3回	昭和57年 7月2日～4日	創造現場の社会科学 —学問方法論の具体化をめざ して—	内田義彦, 伊東光晴*, 山之内靖*, 佐和隆光	38名 (15校)
-----	------------------	-----------------------------------	--------------------------	--------------

▶大学合同セミナー

第4回	昭和57年 6月25日～27日	国民国家の再検討 (10大学合同セミナー10周年 記念)	福田欽一, 蠟山道雄, 三輪公忠*, 加茂雄三, 野林健, 宇野重昭*, 波多野勝, 百瀬宏, 中西 治, 三宅正樹, 佐藤健, 大島英樹, 横田洋三, 馬場伸也, 渡辺昭夫, 浦野起央, 植田隆子, 草津攻, 田中康夫	145名 (12校)
第5回	11月26日～28日	現代社会と社会学 —社会学の新たな可能性を求 めて—	山岸健, 正岡寛司, 田中義久*, 平野敏政, 藤 見純子, 渡辺雅子, 川崎嘉元	92名 (5校)

▶国際学生セミナー

第9回	昭和57年 10月29日～31日	発展と平和のモデルを求めて —日本再考—	吉野文六, 松本洋, 南亮進, 渡辺利夫*, ググ ラス・ラミス, 菊地靖*, 藤本芳男, 横田洋三*, (熊田禎宣)	92名 (27校)
-----	---------------------	-------------------------	---	--------------

▶大学教員懇談会

第19回	昭和57年 10月2日～3日	国際化時代の大学 —教員と研究者を中心とした 交流の現状と将来—	今道友信, 大崎仁, ホセ・デ・ベラ, アリフ イン・ベイ, ハーバート・P・ビックス, 蠟 山道雄, 前田渡, 小林規威, (村田喜代治), (堀部政男), (香原志勢), (司馬正次)	62名 (31校) (運営委員を含む)
------	-------------------	--	---	---------------------------

▶国際フォーラム

第4回	昭和58年 3月25日～26日	現代フィリピン社会の苦悩	シオニル・ホセ, キット・マチャード, (菊地 靖), (広野良吉)	11名 (スピーカー、運営委員を含む)
-----	--------------------	--------------	---------------------------------------	------------------------

*印は運営委員を兼ねた指導教授
()内は運営委員

の参加が減っているのも、社会学系の占める率と関連があると思われる。また、表2③をみると、例年

どおり三年生が最も多く、全体の三三・三%を占めている。学年の分布を教養課程(一、二年生)と専門課程(三年生以上)に分ける

と前者は二五・五%、後者は七〇・四%となり、圧倒的に高学年の参加が多い。今後、企画を立てる場合、工夫を要する点であろう。

〈表2〉昭和57年度教育プログラム参加状況

(計8回：第119～122回大学共同セミナー、第3回大学院共同セミナー、第4～5回大学合同セミナー、第9回国際学生セミナー)

【① 大学別参加者数】

大学区分	男	女	合計	大学区分	男	女	合計	大学区分	男	女	合計
東北大学	1		1	青山学院大学	1	3	4	東京理科大学	2		2
茨城大学	1		1	亜細亜大学		1	1	東邦大学		1	1
筑波大学	20	6	26	桜美林大学	1	2	3	東洋大学	1	2	3
埼玉大学	1		1	学習院大学	3	2	5	日本大学	1	1	2
千葉大学	6	2	8	共立女子大学		1	1	日本女子大学		5	5
東京大学	38	7	45	杏林大学	1		1	法政大学	11 (8)	12 (11)	23 (19)
東京外国語大学	3	5	8	慶応義塾大学	41 (31)	22 (19)	63 (50)	武蔵大学	1	1	2
東京学芸大学	4		4	国学院大学	1		1	武蔵野女子大学		1	1
東京工業大学	1	1	2	国際基督教大学	17 (6)	16 (6)	33 (12)	明治大学	31 (23)	3 (3)	34 (26)
お茶の水女子大学		2	2	芝浦工業大学	1		1	明治学院大学	3 (2)	7 (3)	10 (5)
電気通信大学	3		3	上智大学	9 (7)	3 (1)	12 (8)	明星大学	1		1
一橋大学	29 (15)	4 (2)	33 (17)	成蹊大学	11 (7)	3 (3)	14 (10)	立教大学	6	6	12
横浜国立大学	3		3	成城大学	2		2	早稲田大学	54 (31)	22 (15)	76 (46)
山梨医科大学	1		1	聖心女子大学		14 (9)	14 (9)	神奈川大学	6 (6)		6 (6)
信州大学	2	1	3	清泉女子大学		1	1	関東学院大学	1	1	2
浜松医科大学	1	1	2	専修大学	7	1	8	産業能率大学	1	1	2
名古屋大学	1		1	玉川大学	1		1	私立小計(39校)	226 (124)	183 (96)	409 (220)
京都大学	1		1	中央大学	10 (3)	3 (2)	13 (5)	白梅学園短期大学	1	1	2
広島大学	1		1	津田塾大学		32 (23)	32 (23)	短期大学小計(1校)	1	1	2
国立小計(19校)	117 (15)	29 (2)	146 (17)	帝京大学	1	1	2	社 会 人	16	8	24
東京都立大学	4	1	5	東海大学		1	1	総 合 計	366 (139)	222 (98)	588 (237)
横浜市立大学	2		2	東京女子大学		10 (1)	10 (1)	(6校 短大ふくむ)			
公立小計(2校)	6	1	7	東京農業大学		1	1				

(注) ()内は内数で大学合同セミナー参加者

法人エニエース

第53回理事会

第34回評議員会

昭和58年3月30日

私学会館

〔出席者〕

△理事者▽中川秀恭、村井資長、天城勲、楠川絢一、三宅彰、鈴木皇、吉川孔敏、△監事▽鈴木幸壽

△評議員▽井出源四郎、豊口隆太郎、板垣與一、小谷正雄、大東百合子、川口弘、村山松雄、小川芳男、木下是雄、岡宏子

委任状による者 理事一二名、評議員六五名 (敬称略)

理事会・評議員会合同会議は、中川理事長が議長となり議事に入る。吉川専務理事より議案につき逐次提案説明があり、若干の質疑応答のち、異議なく各案件を承認可決した。

▽役員人事案について

協力会員校の学長新任に伴う立教大学総長高橋健人氏の理事就任、永井道雄氏の常務理事退任(ただし理事として留任)。

▽評議員人事案について

協力会員校の加入・脱退、学長交代および評議員の死去等により、東京電機大学長中野道夫、相模女子大学長豊口隆太郎、立教大学総長高橋健人、聖心女子大学長内山孝子、聖心女子大学教授岡宏子の諸氏の新任、相良惟一、三輪全龍、相馬勝夫、手塚富雄の諸氏の退任。また財界関係者として西武百貨店会長堤清二氏の新任、三

越社長市原晃(交渉中)氏の新任、岡田茂氏の退任。なお市原氏については承諾を得て決定とする。

▽協力会員校の加入・脱退の件

東京電機大学の加入および鶴見大学の脱退

▽昭和58年度事業計画案について

① 三年間据え置いた利用料金の値上げ(宿泊料・食事代一日一〇〇円一率値上げ)を実施する。② 利用予定人員を五万四、〇〇〇人とする。

③ 開館20周年記念事業構想の見直しとセミナー・ハウス再出発のために、①諸施設および経営の

後に見直し、等の検討が必要であり、協力会員校や財界等から幅広く意見を聴くことが要請された。

▽昭和58年度収支予算案について

この案件については、昭和57年度決算報告とともに次号に掲載する。

▽その他

飯田名誉館長に対する職務について、前年度に引き続き昭和58年度においても委嘱する。

▽報告事項

専務理事より「法人税法一部改正通達」に基づき、昭和56年度から当法人の収益事業が一部について右通達に該当することとされ、所轄税務署に青色申告書を提出した旨報告があり、了承された。

東京電機大学を協力会員校として迎える

表2 〔② 学科別参加者数〕

Table with 6 columns: 区分, 男, 女, 合計, 比率(%). Rows include 文 史 哲 教 育 ・ 心 理 学 術 学 科, 法 律 学 ・ 政 治 学, 理 工 農 医 学 ・ 歯 学 ・ 薬 学 政 家, etc.

表2 〔③ 学年別参加者数〕

Table with 5 columns: 区 分, 男, 女, 合計, 比率(%). Rows include 1, 2, 3, 4, 大 学 院 他, 合 計, 比 率 (%)

協力会員校に加入されたことは、大きな喜びである。昭和58年3月30日開催の理事会は全員一致でその加入を承認、心から歓迎の意を表した。電機大学には、セミナー・ハウスを利用される先生方や学生も多く、早くも4月24・25日には電子工学科二〇〇名のオリエンテーションの予約があった。これを機会に当ハウスとの連帯と協力がますます深まることになり、利用者はいつそう増加するであろう。

昭和57年度 第3回共同セミナー委員会

昭和58年3月9日

私学会館

〔出席者〕 岡宏子、江沢洋、友部直、板垣雄三、熊坂敦子、阿久津喜弘、小田晋、峰島旭雄、尾本恵市、芳野勉夫、神吉敬三、徳丸吉彦、山下幸夫(敬称略)

今回は別記一三名の委員の出席の下に、中川館長、飯田名誉館長はかハウスの関係者が陪席して開

催された。議事に先立ち、中川館長より、吉川孔敏専務理事(本年1月1日就任)と企画室職員・榎原健君(4月1日付採用)の紹介が行なわれた。

議事はまず、第120回〜第121回大学共同セミナーの実施報告が、それぞれ担当の尾本、芳野両委員から、また、第5回合同セミナーについては欠席の田中委員からわつて飯田企画室主事より行なわれた。また年度最終のプログラムである第122回共同セミナーの準備状況について主事より、次のような報告があった。ユング・セミナーとしては二回目にあたるが、前回同様に学生の反響が大きく、約二〇名の申込みを断わり、約二室とっては久方ぶりであつた。悲鳴をあげることとなった。

次に、次年度(昭和58年度)のプログラムの協議に入った。まず、セミナーの参加経費について、常務理事会の承認を経て、次のように決定したという報告が吉川専務よりなされた。

●大学共同(合同)セミナー
△二泊三日▽一万円(現行九五〇〇円)
△一泊二日▽七、〇〇〇円
●大学院共同セミナー
△二泊三日▽一万一、〇〇〇円(現行一万五〇〇〇円)
ついで、年度第一回に当たる第123回大学共同セミナーの準備状況について熊坂委員から報告があり、併せて企画案に対する若干の意見交換が行なわれた。次に、第124回共同セミナーについて徳丸委員から、開催日の関係で神吉委員の協力が得られなくなったこと

の報告と、楽器の借入れや演奏家に対する予算についての質問があり、芸術セミナーの実施には必須である視聴覚設備を充実してほしいという要望が他の委員からも出された。

続いて、第4回大学院共同セミナーと第6回大学共同セミナーの準備状況の報告が、それぞれ阿久津、山下両委員から行なわれた。次に今回の主要議題である第125回〜第127回の三分の共同セミナ

昭和57年度 業務白書

●年間利用者五万三、七九九人

昭和57年度の宿泊延人数は五万三、七九九人で、前年度は五万二、九百九十九人で、前年度に比べて八千九百九十九人増えた。前々年度に比べて三万八千九百九十九人増えた。前々年度に比べて三万八千九百九十九人増えた。前々年度に比べて三万八千九百九十九人増えた。

〈表1〉利用者別宿泊人数・ゼミ回数

Table with 5 columns: Category, Seminar Count, Rate, Stay Count, Rate. Rows include Member, Non-member, University, and Total.

●利用者別の利用状況

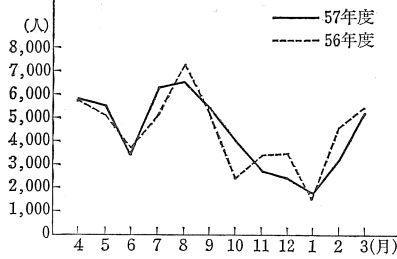
表2に示すとおり、会員校(準会員校を含め計六三校)の宿泊延人数は前年度より三、〇〇〇人近く増え、開館以来初めて三万人を超えた。前々年度に比べて三万八千九百九十九人増えた。前々年度に比べて三万八千九百九十九人増えた。

〈表2〉月別利用状況

Table with 4 columns: Month, Seminar Count, Stay Count, Rate. Rows include months 4-3 and monthly/1-day averages.

会員校、非会員校とも、その利用の大半は教授と学生のゼミ(合宿)に集中している。本年度も平均宿泊日数は一・七泊(前年度も平均宿泊日数は一・七泊)だが、春季の新入生オリエンテーションは年々その数を増し、その内容も各大学の努力で工夫、充実されている。本年度4月7日に実施された新入生合宿(クラス単位以上)は計四九件、延べ六、二三五人(うち教職員五八二人)を数えた。

〈図1〉宿泊延人数の変動(昭和56-57年度)



●年間宿泊利用率五六%

宿泊延人数を宿舎(収容定員二七〇人)の利用率に換算すると、利用率は五六%となる。これは前年度より二ポイント上昇している。

●利用者のための交歓プログラム

利用者のための交歓プログラムとして、夕食時の交歓会、季節行事、遠来荘での茶道教室などの広場“独自の交歓”

〈表3〉会員校利用状況

Table with 5 columns: Rank, School Name, Seminar Count, Stay Count, Rate. Lists 15 member schools.

(注) 1. 本表には準協会員校は含まない。 2. 本表には通信教育スクーリング学生の宿泊数は含まない。

1のテーマをめぐって、種々の意見交換が活発に行なわれ、次のように大要を決定した。第125回は、昨年12月にA・A作家会議の関係者から申し出があり、部内で検討してきた企画室案が原案として承認されたものであり、第126回と127回は、同委員会が決定した原案をもとに、企画室が運営委員との調

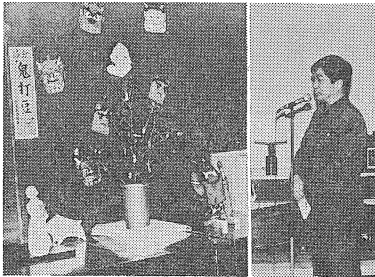
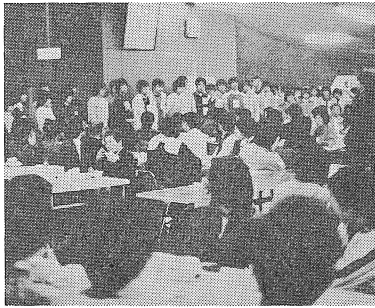
●事業部だより

58年2・3月
冬から春へのキャンパスから

●2月―学年末の合宿から

毎年2月には、学年末試験を終えた各大学の合宿が再開される。『卒論合宿』の季節でもある。この月のグループ数は八五、宿泊利用者は延べ三、二二四人である。

同月後半には個人大学の合宿のほか、大学の枠を超えた研究会の利用が見られる。「インド卒論研究会」は九年前、千人会員の小西正捷・立大(当時法政大)教授らの提唱で実現。今回は五大学からの一八名が参集して、インドの歴史や仏教学等についての研究発表と討論を行なった。「学会のないこの領域では特に貴重な交流の機会」(日田雅之・東海大講師)になっている。「明日の地球科学を考える会」は昨年に続いて2回



食堂での交歓 [上] 美しいパッハの合唱曲を披露する明学大グリークラブ。[下]「豆まき」に先立ち節分の想い出を語る池田中大教授

目で、二一の大学と関係団体から九四名が参加。これも地質、地球物理・化学、海洋、古生物など「日頃あまり交流のない各分野の若手研究者が活発に議論できる場」(藤岡換太郎・東大海洋研究所助手)である。

この月の交歓風景を拾ってみよう。まず立春前夜の2月3日、夕食時の食堂で恒例の節分・豆まきが行なわれた。柀(ひいらぎ)とイワシの飾りつけを前に、池田正孝・中大教授が子供の頃の節分の夜の想い出を話され(写真)、在泊四グループからの「年男」らが元気に「福は内、鬼は外」と豆をまいた。2月12日の週末、夕食時に九グループ二七〇名が交歓。十数年ぶりに来泊され、感慨ひとしおという千人会員の岩井肇・日大講師がスピーチをされた。毎日新聞勤務三十余年の後、日大新聞学科教授として迎えられた同氏は、定年後も講師としてマスコミ志望の学生の指導を続けておられる。八〇歳をこえる高齢でなおカクシヤク、今回も「新聞研究グループ」の学生と一泊された。ハウス

再訪の感想が、後日同氏から寄せられている(別掲)。なお、この夜の交歓会では、引き続き明学大グリークラブの五三名がパッハのオラトリオから美しい合唱二曲を披露(写真)。たまたま、手話や筆談で三泊の合宿を続けていたローア・パプテストの聴覚不自由者の方々も、その雰囲気を喜んでくれた。

●3月―春休みの諸集會から

この月は、休暇を利用した二泊三泊の合宿がぐっと増える。東京学芸大植物系統分類ゼミは四泊、立大物理自主ゼミと杉野女大教育原理ゼミはともに五泊、東邦大倫理学ゼミは七泊の長期合宿を実施した。同月の来泊グループは一一一、宿泊延人数は五、二七四人である。

国際交流風景も、春休みのもう一つの特徴である。恒例の「大学生仏語集中訓練」(二二校・二六名)や、今年で四年目の「大学院仏語セミナー」(五大学・一六名)では、参加者は仏人講師とフランス語だけで七、九日間をすごした。一五年目を迎えた東大「比較文学・比較文化」の春の合宿では各国の留学生や研究者が来泊した。またこの春も、YFU日本協会の交換プログラムで来日したオーストラリアの留学生十数名が日本語の研修で一三泊している。

2月5日の週末、夕食時の食堂で六グループ二三名が交歓、このたび会員校加盟が決まった東京電機大の電気通信学科二八名を特別に歓迎し、千人会員の狩野紀昭・東京理科大学教授がスピーチをされた。冬期の間は休止していた遠来

ハウス再訪雑感



元日本大学教授
岩井肇
(千人会員)

昭和40年の秋、大学セミナー・ハウスが開設された時、私は新聞でそのことを知って、さっそく学生を連れてここで合宿をした。周囲が緑に包まれた高台に立つ威容の建物、学生が二人ずつ眠れるこの宿泊棟、また風格のあるセミナー室などに魅せられたものだ。飯田館長や土田課長らの懇切さも嬉しかった。以後数年間、ゼミやクラブ活動の学生と合宿を続けた。

しかし、その後自分の大学で伊豆にセミナーハウスができたことから、ここ十数年間八王子を訪ねることはなかった。ところが、久しぶりに2月12、13両日学生と共にここで合宿を試みた。まず目をみはったのは大講堂、図書館、教師館、長期セミナー館、交友館など、
http://www.haus-honjo.ac.jp/

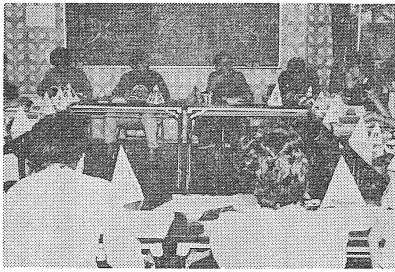
●16年目の専修大望月ゼミ
年々歳々必ず春合宿でこの丘に戻って来て下さるグループの一つに、専修大経済学部の望月ゼミがある。今年で3月23日から三泊四日の集中演習で二五名が来泊した。同ゼミの初利用は昭和42年春、今年で連続の一六年目という

ど、新しい建物が多くでき上がってスッキリ整備されていることだった。しかし反面、野猿峠のバス停からハウスまでの間が、深い樹木に包まれていた十余年前に比べ、今は付近が開発されて、山の姿が消えて多くの住宅が建っており、かつての閑静な環境が見られないのに、時の流れの激しさを感じた。

交友館でお茶を呑んでいたら引課長の案内で、かつての土田課長が偶然に訪ねて来られたのに会うことができたのも予想外の喜びだった。飯田名誉館長とも電話で話したが、元気な声を聞いて十余年前を回想した。
夕食時には在泊者の交歓の集いも催された。学生も喜んでくれた。教師館の窓から、はるかに雪の富士山が見えたのも気持ちよかった。

(注) 文中の土田(美芳)氏は、ハウス草創期に業務課長等として十年間勤務、ご苦労された先輩の一人。

ことになる。その間、自前の研修施設を持つ大学が増えた。それでも、学生をここまで連れて来るのは、「ここには真に学問を愛する心があるから」と望月清司教授(同大経済学部長)はおっしゃる。「学問の聖域」と云われるほどにハウスの目指すところを大切に考えられる常連教授のお一人である。参加学生諸氏の学習への熱意にも、自律的な生活のあり方にも、同教授のそのような姿勢が反映されているようである。本号の「わたしたちの合宿」欄には、同ゼミにご登場を願った。



熱のこもった集中演習——望月教授(中央)を囲んで(第2セミナー室)

◆わたしたちの合宿◆

一六六日に想う

セミナー・ハウス

の「思想」

専修大学教授 望月 清司

セミナーの春合宿の場を大学... 六年になる。いくつか建物が増え、樹々は枝をのびした。鉄道の古枕木でこしらえた階段が少しづつコンクリート製になっている。外界も変わった。野猿時はきり開かれ、白く広い道路に車が走りひびく。しかし、いろは坂を登りつめた広場からの眺め、学ぶ者を細やかな心づかいでむかえるハウスの空気は少しも変わっていない。その年ごとの投票で高原や海辺へゆく夏合宿もよい。学生も、三日目午後の遠出やその夜のコンパを心待ちにして苦行に耐えるかのようだ。昨年は要望もだしがたく、ゼミ開びやく以来のカラオケ大会とはなった。勉強する広間の

床の間にこれ見よがしのカラオケ・セットが鎮座しているのだから無理もない。せかされて陽水の「心もよう」をうなりながら、あらためてセミナー・ハウスの清澄なたたずまいを想ったことであつた。

民宿の(あるいは似たような施設の)八畳間にザコ寝の枕を並べて深夜まで人生を語るのも、たしかに青春の栄養にはなる。だが、集団へのそのうした溶融の安らぎは本来個々人の営みでしかありえぬ知的緊張をあまく解きほぐしてしまふ。「セミナー・ハウス」第何号かの対談で、故吉阪教授は「ほんとうは一人一戸のユニット・ハウスにしたかった」と語っておられた。設計者たちは、何かを学ぼうとする。加えて、草創期のとぼしい予算をやりくりしてこの「思想」を最大限に生かそうとした創設者たちがいた。この思想とこれらの人びとに呼びさそわれるようにして、私たちは毎年三月末この丘にやってくるのである。

三泊四日のあいだ、時間をみつめてこのハウスをひとめぐりしなさい、と私は学生にいう。この小世界のすみずみまで、学問する人間への心くばりと、何より「平凡であること」を恥じる「精神が浸みわたっていることを肌身で感じとってもらいたいからだ。

早春の木立ちのなかで、私たちは毎年、内田義彦氏の『資本論の世界』(岩波新書)を読みつづけてきた。底知れぬ奥深さをひめめがゆえに、この本は二度目や三度目の読者に安心をゆるさない。ゼミのOBたちにとって、だからこ

●利用状況

* 11月2回利用
* 12月3回利用
日帰り利用者を除く

2月

(85グループ、延三、二四人)

東京農業大学助教	佐々木 豊
津田塾大学講師	長岡 亮介
法政大学助教	森 博美
中央大学助教*	石川 敏行
中央大学講師	大橋 洋一
中央大学教授	池田 正孝
青山学院大学助教	佐藤 節子
青山学院大学助教	笹森 健
東洋大学教授	藤木三千人
駒沢大学助教	谷敷 正光
法政大学教授	五味 健吉
法政大学ユースホテル研究会	麻生 幸
千葉商科大学助教	藤生 幸
駒沢大学美術部	
明治学院大学人形劇団ZOO	
中央大学教授	佐藤 光威
明治大学教授	田中 政男
明治大学教授	牧野 誠一
明治大学教授	原 正彦
中央大学教授	高柳 先男

こは常に「恐怖のセミナー・ハウス」であった。だがそう言いながら彼らの目は、青春の証明だったハウスを遠く思い眺めている。数年前、梅小路に植えていたいたわがゼミ記念の白梅もどうやらしつかりと根づいたようだ。このような時節、ハウスの経営にもひとかたならぬ困難があるうと推察するが、それだからこそハウスの理想をより多くの大学生に理解してもらおうための工夫を期待してやまないのである。

文教大学聖書研究会

早稲田大学助教	村上アブタン
法政大学教授	霜島 甲一
立正大学講師	松本 悦夫
東京農業大学教授	岩崎代志治
明治学院大学グリーンクラブ	
岩井 肇	
板倉 達文	
池上 秋彦	
早稲田大学国際学生友好会	
立正大学助教	野宮 尚武
立正大学教授	武澤 信一
立正大学助教	柳沢 寛治
立正大学助教	寺東 寛治
立正大学助教	金子ハルオ
立正大学助教	鳴澤 実
立正大学助教	安孫子誠男
立正大学助教	清水 誠
立正大学助教	蓮見 音彦
立正大学助教	上野 和彦
立正大学助教	長内 了
立正大学助教	稲木 哲郎
立正大学助教	藤枝 静正
立正大学助教	塚田 富治
立正大学助教	鶴田 忠彦
立正大学助教	鈴木 和幸
立正大学助教	淵 倫彦

横浜商科大学助教 平野 文彦
女子聖学院短大講師 浜田 辰雄
都留文科大学教授 和田 明子
東京スクールオブビジネス 全関東学生商業英語連盟
インド卒論発表研究会
明日の地球科学を考える会

●ご苦労様—宿舎の裏方一八年

「カゴに乗る人、かつぐ人、そのまたワラジをつくる人」——共同セミナー委員長の岡安子先生が、先年本紙上での『対談』で、裏方としてそれぞれの任にあたるハウス職員について言及されたことばである。開館以来の宿泊者七三万余人、その宿舎とベッドの準備は日々どうしても欠かせぬ仕事の一つである。ハウスの創業の日より一七年九ヵ月、宿舎係チームをまとめ、簡素な宿舎をつねに清潔に保ち、来泊者を気持ちよく迎えることに「心」を注いできた荒川孝子さん(宿舎係長)がこの3月末、その職務を全うして定年退職の日を迎えた。「ワラジをつくる」もの同士として、心から「ご苦労さま」を申し上げたい。なお、荒川さんは引き続き嘱託として従来の任務に精励している。

- 万国ローア・バプテスト福音伝道協会
- 日本バプテスト同盟
- 司法研修所司法修習生有志
- 東京松本英語専門学校
- 東芝回路部品エンジニアリング
- アイワールド**
- 東京重機工業
- オリンパス光学工業*
- 小松ゼノア*
- 日建設計
- 富士電機東京工場
- 日本水産
- 大沢商会自動車用品部
- 日本トラベラー
- 京王帝都電鉄
- 日本電気
- 日出島版所

〔個人利用〕

- 東洋大学助教 堀 光男
- 女子聖学院短大学生 松本 郁子
- 3月
- (山グループ、五、二七四人)
- 東京大学教授 見田 宗介
- 東京農工大学助教 鉅鹿 健吉
- 東京学芸大学組織部
- 横浜国立大学体育系サークル指導者セミナー
- 武蔵工業大学体育会指導者養成講習会
- 成蹊大学教授 広野 良吉
- 東京都立大学教授 石村 善助
- 電気通信大学ユニスコ研究会
- 電気通信大学企業管理理学講座
- 東京工業大学教授 高原 康彦
- 東京都立大学講師 森岡 清志
- 成蹊大学文化会
- 上智大学教授 永井 道雄
- お茶の水女子大教授 尾田 幸雄
- 筑波大学情報学類見学会
- 東京外国語大学講師 高橋 正明
- 立教大学講師 小泉 哲夫
- 慶応義塾大学スピーチ会
- 東京都立大学教授 奥山 典生
- 早稲田大学教授 示村悦二郎
- 立教大学Nuclear
- 法政大学看中会II部中国語研究会
- 芝浦工業大学助教 大和田義正
- 東京学芸大学助教 小町谷照彦
- 東京学芸大学助教 小町谷照彦
- 早稲田大学理工学部英語会
- 法政大学助教 船橋 晴俊
- 東京学芸大学生生活協同組合
- 一橋大学生協組織部
- 東京都立大学教授 中原 弘道
- 一橋大学助教 塚田 富治
- 中央大学教授 家永 三郎
- 聖心女子大学E・S・S
- 早稲田大学学生シンポジウム実行委員会

- 中央大学教授 吉村 二郎
- 慶応義塾大学教授 山田 辰雄
- 慶応義塾大ビブリオメトリック研究会
- 東京大学助教 山本 泰
- 東大比較文化研究室
- 大妻女子大学助教 大場 幸夫
- 東京大学一九一〇年代史研究会
- 上智大学AIIESSEC委員会
- 東京都立大学講師 山川 仁
- 千葉大学医用電子工学研究会
- 慶応義塾大学教授 石坂 巖
- 中央大学教授 森松 健介
- 駒沢大学教授 寺中 良二
- 専修大学教授 望月 清司
- 中央大学学友会新入生歓迎合宿
- 中央大学教授 原田 行男
- 早稲田大学教授 杉山 雅洋
- 中央大学教授 林 昇一
- 明治大学教授 高木 仁
- 中央大学助教 木島 淑孝
- 上智大学教授 F・ペレス
- 東京工業大学助教 安藤 正海
- 早稲田大学講師 深沢 実
- 中央大学教授 岩波 一寛
- 青山学院大学助教 中沢 進一
- 東海大学教授 坂田 長生
- 駒沢大学教授 桜井徳太郎
- 東京大・国際基督教大教育心理研究会
- 専修大学教授 竹林 代嘉
- 慶応義塾大学教授 西川 俊作
- 東京理科大学教授 国分 康孝
- 中央大学経済学会
- 桜美林大学教授 大庭 篤夫
- 東京電機大学助教 安田 寿明
- 東邦大学講師 坂口 耕史
- 東京電機大学学生赤十字奉仕団
- 独協大学教授 宮川 淑
- 産業能率大学教授 安本 美典
- 東北大学教授 佐藤 徳芳
- 東京YWCA専門学校

卒業に際して
——セミナー・ハウスの思い出——
ハウスの思い出——
立教大学文学部4年 大古場淳子

「大学セミナー・ハウス」という特異な場を知り得たのは、私の大学生活の中で最大の収穫のひとつだったように思う。下界から隔離されたような立地条件のせいなのか、そこではおわれわれは、日常の逡巡や虚飾を捨てて、自分のポジティブな側面を素直に表現できるようにだった。

私が初めてセミナー・ハウスを訪れたのは、大学三年の夏である。私の大学では、毎年夏に集中合同講義というプログラムがあり、「歴史における『戦後』の意味」というテーマで四泊五日の合宿がここので行なわれた。シヨックであった。朝から深夜に至る講義や討論の中で、自分がいかに無自覚に、漠然とした問題意識しか持

たずに生活していたか、思い知らされた。叩きのめされたような痛みとともに、私は妙な清浄感をも覚えていた。大学の既成のプログラムでは見出しえなかった諸々の刺激を受けて、入学以来の焦燥や失望が融解していく感覚であった。

卒業までに、結局、私は二回の集中合同講義と三回の大学共同セミナーに参加した。特に共同セミナーは、常に、思いがけない人々と知り合う貴重な機会を与えてくれた。「初めに関係がある」というブルーバリーの美しい言葉を身をもって体験できたように思った。

セミナー・ハウスは、砂丘にほらまかれたビーズのように、未だ組織化されず個の中に留まっている諸々の思惟や想念が、一時的にせよ集い、コミュニケーションを持つ場である。今後、貴重な出会いが八王子の丘で紡ぎ出されることと思う。

- アイワールド**
- ハマゴム計算センター
- 小西六写真工業
- 京王百貨店
- ヒノキ新薬
- 日本能率協会IEE推進センター
- 小松ゼノア
- 日本電気府中事業場
- 多摩中央信用金庫
- 金田建鉄工業
- マンダオート東京労働組合
- 〔個人利用〕
- 東洋大学助教 堀 光男
- 中央大学学生 長谷川 孝
- 文京女子短大卒業生 山村 朋子
- 女子聖学院短期大学助教 小倉 義明

●編集後記

3月に開催された第122回大学共同セミナーに、一七名の四年生が参加した。送別昼食会の場を借りて、かれらのために小さな卒業式が行なわれ、中川館長から若い人々の未来に対して温かい励ましのお言葉が贈られた。その中の一人、大古場淳子さんが、後日、別掲の一文を寄せて下さった。

なお、今年から榊原健君（ICU修士卒）が企画室のスタッフに加わった。写真は、セミナー会期と重なって大学の卒業式に出席できなかつたかれのため、急ぎよめ、急ぎよめ、同じ席上行なわれた卒業式の模様である。



本号では、昭和57年度の活動を総括した白書を掲載した。各委員会の諸先生のご協力により、この一年も多彩な企画が実現し多くの出会いが織りなされたことを、感謝をもってご報告しておきたい。

現代風の合宿施設が手軽に求められる状況にあつて、当ハウスの建築群は、あたかも孤高を持するかのごとくである。「わたしたちの合宿」に寄せられた望月清司専修大教授の一文は、改めてハウスの思想性をわれわれに突きつけている。何よりも、単なることばでない、十六年間続けられた実践と行動が、われわれの心に響いてくるからである。

(能)